

## 聖性の土台は『誠を生きる』

先日、受験生が「今は勉強に命を懸けています」と話してくれました。「命を懸ける」久しぶりに聞きました。将来は仕事に命を懸ける人、命を懸けて生きる人になってほしいと思いました。現代では「命懸け」と言っても実際に死ぬことはありませんが、幕末、日清・日露戦争、大東亜戦争では本当に死ぬことも珍しくありませんでした。たとえば、『誠』を旗印に掲げた新撰組の土方歳三は、幕府を守るために命を懸けましたが、幕府滅亡して死を迎えています。外から見れば失敗の人生ですが、内的に見れば志に人生を賭けて人生を完成させたのです。新しい国造りを目指した坂本竜馬も志半ばで暗殺されまが、志を貫き、命を完全燃焼させました。これも失敗ではなく、人生の『完成』なのです。

このような生き様を『誠を生きる』と言い、戦前の日本で当たり前でした。これは遥か昔からの伝統で、大君（天皇）に命を捧げる「海ゆかば」という古い歌があります。この『誠』の精神こそが、キリスト教につながる生き方です。誠は、「言が成る」と書きます。口にした言葉は必ず実現させるという信念です。また「まこと」は「ま・こと」で真心の真に言葉の言で真言宗の真言です。言葉を真実にする覚悟を表わしています。キリスト教の根本は「み言葉は人となり、私たち内に住まわれた」です。言葉が成った「誠そのもの」なのです。キリスト信者は、このイエスの生涯を模範として生きるわけです。「誠を生きる」ことが土台なのです。

誠は志と切り離せません。「志」は武士の心と書きます。武士道です。伝統によれば「主君のために命を捧げること」です。そしてキリスト教は「友のために命を捧げる」ことを最高の愛と教えています。「どこまで愛せばいいですか？」という制限や条件を設けません。それを自己愛から出るからです。自分の力を自分のために使わず、隣人に仕えるために使うのがキリスト教です。「志」も自己愛を否定して主(あるじ)に差し出すことを意味します。殉教者は自分の命に代えて主イエスを守ります。外から見れば権力に「負けた人生」に見えますが、信仰の目で見れば、権力に服従するより信仰（誠）を命懸けで守り抜いた「人生の勝者」です。たとえ負けても誠（正しいこと、善いこと、美しいこと）守り抜く覚悟、裏切らない覚悟で生きることが「誠を生きる」なのです。

福音書は、たとえ話で同じことを教えています。「善い羊飼いは、狼が来ると命懸けで羊を守る。悪い羊飼いは、羊を置き去りにして我先に逃げる」のです。いつでも、どこでも誠を貫く生き方が聖化の土台です。信仰のオマケではありません。生活と仕事こそが戦いの舞台です。聖母マリアはお告げを受けた時「神のみ旨が、私において成るように」と「誠の心」で神に応えました。さあ「誠」を生きることから始めましょう。■2024/10/20

\*長与教会、勉強会（文責：小寺神父）